親しい友人間における「いじめ」と性差
―小学生の場合―

藤原正光*・鵜飼彩乃**

Bullying, Intimate Friendship and Sex Differences in Elementary School

Masamitsu FUJIHARA, Ayano UGAI

要旨　親しい友人間におけるいじめと性差について，いじめの加害体験と被害体験とに分け，友人への満足度，社会性関連因子（協同・自己主張），排他性関連因子（気分・行動）との関連を検討した．本研究は，三島浩路（2003）の追研究である．小学校5･6年生285名を対象とした．しかし，回答票回収時の不手際により，性差の分析は，男子85名，女子77名を対象とした．因子分析（主因子法，プロマックス回転）及びパス解析を行い，次のような結果が得られた．加害体験と被害体験は密接に関連しており，加害体験では，友人への満足度と負の関連が，被害体験では，男子に友人への満足度と負の関連が有意であった．また，社会性関連因子と排他性関連因子とは負の関連にあり，加害体験では，女子の「社会性・自己主張」と負の関連が，男子の「排他性・気分」及び全体（男女込み）の「排他性・行動」と正の関連がみられた．被害体験では，女子の「社会性・自己主張」が負の関連を，「排他性・行動」と正の関連が，全体の「排他性・気分」と正の関連がみられた．親しい友人間のいじめにとって，社会性関連因子は抑制的に，排他性関連因子は促進的に働くことが示唆された．
キーワード：いじめ　小学生　友人関係　社会性　排他性

問題と目的

いじめは，「いじめること．特に学校で，弱い立場にある者が精神的及び身体的に痛めつけられること．」（広辞苑5版）と定義され，セクシャル・ハラスメント，パワー・ハラスメントの用語とともに，近年，最も注目を集めていることばの一つである．学校におけるいじめは，『平成18年度「児童生徒問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査査」について』（文部科学省　2007）が基準になっている．そこでは，「当該児童生徒が，一定の人間関係のある者から，心理的・物理的な攻撃を受けたことにより，精神的な苦痛を感じるもの」と定義されている．

文科省の同じ調査結果では，いじめの発生件数は12万4,898件（2007年現在）であり，前年度比は，小学校で約12倍，中学校で約4倍，高校で5.5倍，特別支援学校で5.5倍となっており，小学校の伸び率が最も著しいことが示されている．また，近年，ネットによるいじめの増加も指摘されている．文科省（2008）が発表した携帯電話等によるいじめの件数は，5,899件（前年度より1,016件増加）で，いじめの認知件数に占める割合は5.8％（前年度より1.9％増加）であった．

本稿でのいじめの定義は，坂西友秀（1995）の「いじめは，当人の主観的判断に依存するもの」との考え方を参考に，いじめたと感じる主観的体験を「いじめの加害体験」，いじめられたと感じる主観的体験を「いじめの被害体験」と定義し，児童の主観的体験からいじめ問題を考察することとした．

修学前（幼児期の後期）や児童期前期・中期には，身体的な強者が弱者をいじめの対象とする「身

*ふじわら　まさみつ　文教大学教育学部心理教育課程
**うがい　あやの　川崎市立三田小学校

体的いじめ」が多くみられるが，児童期後期・青年期以降はことばによる「精神的いじめ」が多くなり，不登校や自殺といった「深刻ないじめ」のケースへと発展していく事例が数多く報告されている．

森田洋司・滝　充・秦　政春・星野周弘・若井彌一（1999）は，いじめっ子といじめられっ子は遊び仲間である事例を数多く紹介し,「いじめっ子たちと遊びを求めてゆくのは，一つには仲間から孤立し，切り捨てられることへの恐れが働いている.」と述べ，親しい友人間の「いじめ」研究の必要性を示唆している．

親しい友人間のいじめと性差について，三島（2003）は，女子の方が，いじめの被害体験が有意に多く，また，被害体験と「友人に対する満足度」に強い負の関連（いじめ体験が多いほど，満足度が少ない）を見出している．

Eder & Hallinan（1979）は，小学5・6年生を対象に友人関係の調査を行い，女子の方がより排他的な対人関係であること示している．また，Buhrmester & Furman （1986）は，小学2年と小学5年と中学2年の児童生徒を対象に,「自分の気持ちを伝えられる度合い」を指標として「親密性」を調査した. 小学2年では親密性に性差は見られなかったが，小学5年と中学2年では，女子の方が同性の友人に高い親密性を示していることが確認された．吉田寿夫・荒田則子（1997）は，小学5･6年生を対象に友人関係の調査研究をおこなった．女子の方が仲のよい友だちとばかり話す傾向が高く，友だちへの同調傾向が強いことを見出した．したがって，三島（2003）の「男子に比べて女子の友人関係の方が排他性や親密性が高い」ことと,「親密な友人関係を求める傾向の強さや排他性の高さがいじめと関連する」ことを示唆している竹川郁雄（1993）の指摘と合わせて考えれば，男子に比べて女子の方に，いじめがより多く発生していると推論できるいくつかの知見を支持できる．

親しい友人関係には，どのような要因が影響しているのだろうか．友人関係の形成過程には，相手への共感的・許容的な態度，同じ行動や態度を取りたい協同的行動・態度などが強く働き，メンバー間のまとまり（凝集性）やポジティブな相互依存性（親密性）が高くなることが予想される．また，親しい友人関係が崩れる場合は，これとは逆に，否定的・拒否的な態度，排他的で敵対的な行動が現れると考えられる．したがって，親しい友人関係の形成過程と崩壊過程を検討することにより，小集団内のメンバー間の中心的メカニズムが明らかになるものと考える．

親密性や排他性以外に親しい友人間のいじめに関係していると思われる要因には，自己主張や共感的スキル等の社会性関連要因が考えられる．岡安孝弘・高山　巌（2000）は，中学生を対象としたいじめに関する研究をまとめ,「自己主張技法や問題解決のための社会的訓練は，いじめのコーピング方略として重要である.」と述べている．相川充（1999）は,「社会的スキルの不足が，いじめや不登校，学業成績などと関連している.」と述べている. また, 三島(2003)は,「イギリス教育省(1994)は，自己主張・自己表現の訓練が「いじめ」に対処する力を養う方法の１つであると考え，訓練のための具体的プログラムを提示している.」と述べている．共感的スキルは，いじめの加害者や被害者の心情を理解する能力と関係しているため，自らがいじめの加害者になり，傍観者であり続けることは困難であると考えられる．このように，社会性関連要因は，いじめの被害体験や加害体験と負の関連にあり，社会性関連要因が強くなればなるほど，いじめは減少すると予想できる．

「友人に対する満足度」は，親しい友人からのいじめの被害体験の方が親しくない者からの被害体験より影響が大きいと考えられる．つまり，親密な友人関係が形成されていればいるほど，親密な関係が崩れたときの落胆は大きく，仕返しとしての反発感情が生じ，親密であった友人への憎しみや反発や排他的行動の生起を容易に予想することができる．

作業仮説

1) 親しい友だち・親しくない友だちからのいじめの被害体験を検討する.
2) 親しい友人間にみられるいじめの加害体験と被害体験を検討する.
3) 親しい友だちへの加害体験と親しい友人からの加害体験と友人への満足度を検討する.
4) 親しい友人間のいじめに影響を及ぼすと考えられる要因の構造を検討する.
5) 親しい友人間のいじめに影響を及ぼすと考えられる要因といじめの加害体験・被害体験に及ぼす影響をパス解析から検討する.

方　法

調査対象者　横浜市内の小学校2校の５年生153名, 6年生65名，計285名であった．その内，性差の検討の際，質問紙回収時のミスにより男女の判別不可能となったものを省き, 分析の対象とした者は, 男児85名，女児77名であった（Table 1）.

Table 1　被験者の内訳

	5年生	6年生	計
男子	52	33	85
女子	45	32	77
計	97（153）	65（132）	162（285）

（　　）：男女分類不明者数を含めた数

調査手続　質問紙への回答は，協力校の担任教師が質問項目を読み上げ，学級内の児童は一斉に回答欄に記入した．質問紙の回収は，後日，調査者が協力校を訪問することによりなされた．調査期間は，2008年12月であった.

質問紙の構成　質問紙は, 友人への満足感（1項目), 親しくない友だちからのいじめ体験（1項目）を含む以下の項目から構成されている．回答形式は, いずれも5件法（1：ない　2：ほとんどない　3：ときどきある　4：ある　5：よくある）であった.

親しい友人のいじめ加害体験（4項目）・被害体験（2項目）：いじめの加害体験は,「意地悪なことをしたい」「いじめたことがある」「仲間外れにしたことがある」「無視したことがある」の4項目から構成されている．いじめの被害体験は,「いじめられたことがある」「無視されたことがある」の2項目である（Table 4）.

親しい友人間のいじめに影響を与えると考えられる要因（19項目）：三島（2003）の質問項目（19項目）をそのまま実施した（Table 6）. 項目内容は, 社会的スキルに関係する共感・援助スキル（4項目）と積極・主張スキル（4項目），排他性（6項目），友人指向性（5項目）から構成されている．友人指向性と排他性に関する項目は，それぞれの定義をもとに高学年児童の生活実態を勘案して作成されている．また，社会性スキルは，庄司（1994）の「共感・援助的かかわり」因子と「積極的・主張的かかわり」因子を示す項目から構成されている.

結果と考察

１）親しい友だち・親しくない友だちからのいじめの被害体験

親しい友人からのいじめの被害体験を低群（評定値1及び2），中群（評定値3），高群（評定値4及び5）に分けて検討した．低群（110名　68％），中群（22名　14％），高群（30名　19％）であり，いじめの被害体験が有意に少ないことが示された（低群と中群　X^2 (2) =98.87, ｐ＜.001）（Table 2）. いじめの被害体験の性差には，有意な違いは認められなかった（X^2（2）=.117,　n.s.）.

親しくない友人からのいじめの被害体験を，低群（評定値１及び２），中群（3へ），高群（4及び5）に分けて検討した．低群（112名　69％），中群（24名　15％），高群（26名　16％）であり，いじめの被害体験が有意に少ないことが示された（低群と中群　X^2（2）=83.61，ｐ＜.001）（Table　3）．親しい友人からいじめの被害体験と親しくない友だちからの被害体験の相関は有意であった（r=.264, p<.001）．「いじめ」の被害体験の性差は，有意で

はなかった（X^2（2）=.294,　n.s.）.

Table 2 親しい友人からいじめられた体験

	低群	中群	高群	計
男子（人）	55（65）	16（19）	14（16）	85
女子（人）	55（71）	6（0.8）	16（21）	77
計	110（68）	22（14）	30（19）	162

（　　）：％

Table 3 親しくない友人からいじめられた体験

	低群	中群	高群	計
男子（人）	62（73）	13（15）	10（12）	85
女子（人）	50（65）	11（14）	16（21）	77
計	112（69）	24（15）	26（16）	162

（　　）：％

これらの結果から，親しい友だち（19％）・親しくない友だちから（16％）のいじめの被害体験は，他の研究結果から予想されたとおりであり，男女ともに同じ傾向であることが示された. また，親しい友人からの被害体験と親しくない友だちからの被害体験の相関が有意でることから，両者のいじめの被害体験には何らかの共通性の存在が示唆された.

2）親しい友人間にみられるいじめの加害体験と被害体験

親しい友人を「いじめた体験」（4項目）と親しい友人から「いじめられた体験」（2項目）の因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った（Table 4）. 2因子を抽出し，因子A（α=.811）を加害体験，因子B（α=.728）を被害体験とした. 因子A（加害体験）と因子B（被害体験）との間に有意な正の相関がみられた（全体：r=.420,　p<.001, 男子：r=.443,　p<.001,　女子：r=.774,　p<.001）. また，因子B（2.06）が因子A（1.89）より有意に高いことが示された（t（281）=3.191,　p<.01）.

この結果は，親しい友人へのいじめの加害体験と被害体験は，相互に関連をもっており，被害体験が加害体験より多く，男女ともに同じ構造であることが示された.

因子A（加害体験）と因子B（被害体験）別に，いじめの平均得点の性差を検討した（Table 5, Fig.1）. 因子Aでは，男子の平均得点（1.88）が女子（1.67）より有意に高く（t（159）=1.974,　p<.05），因子Bでは，男子（2.14），女子（2.12）であり，有意差はみられなかった.

加害体験は,男子の方が高く，被害体験には,男女差が確認されなかった.

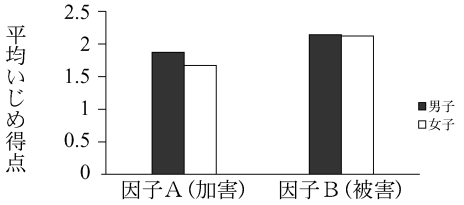

Fig. 1 因子（加害・被害）、男女別平均いじめ得点

3）親しい友人への加害体験と親しい友人からの被害体験と友人への満足度

友人への満足度に関する項目への得点を目的変数（従属変数）とし，因子A（いじめの加害体験），因子B（いじめの被害体験），「親しくない友だちからのいじめ」項目への得点を説明変数（独立変数）としたパス解析を行った（Fig. 3）. 因子A（加害体験）は「友人への満足度」に弱い負の関係（推定値β=-.180,　.05<p<.10）がみられた. しかし，因子B（被害体験）及び「親しくない友だちからのいじめ」とは有意な関係はみられなかった. 有意な性差は認められなかった.

ちなみに，因子B（被害体験）は，「親しくない友だちからのいじめ」と有意に関連（β=.222, p<.05）しており,男子にのみ，因子A（加害体験）と「親しくない友だちからのいじめ」との関連（β=.350,　p<.05）がみられた. 因子Aと因子Bは，男女ともに強く関連していた（男子β=.487,　P<.01 女子β=.802,　p<.001）.

親しい友人への加害体験は，「友だちへの満足度」を減少させている. しかし，親しい友だち及び親しくない友だちからのいじめの被害体験は，必ずしも友だちへの満足度とは関係していないこ

とが示された.

また, 親しい友だちへの加害体験や被害体験が, 親しくない友人からのいじめと関連している結果は, 仲間同士の加害・被害体験（いじめ合い）が, 親しくない友人からのいじめを招いているという解釈の難しい結果となっている.

４）親しい友人間にみられるいじめに影響していると考えられる要因の構造

親しい友人間のいじめに影響していると考えられる要因の構造を明らかにするために，19の質問項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った．共通性が2.00以上であり，1つの因子に対して絶対値が３.00以上の因子負荷量であることを基準に13項目を選び，分析対象とした（Table 6）．因子分析の結果，因子1（社会性・協同，α=.647），因子2（排他性・気分，α=.819），因子3（排他性・行動，α=.637），因子4（社会性・自己主張，α=.814）の4因子を抽出した．因子間の相関係数は, 因子1と因子4が有意に相関（r=.427, p<.001）し，因子2と因子3とが有意に相関（r=3.27, p<.001）していた.

4因子の因子別平均得点の性差は，因子１（男：3.54，女：4.21），因子2（男：1.89，女：2.77），因子３（男：2.79，女：2.57），因子4（男：3.32，女：3.36）であり，有意な性差は，因子1で男子＜女子（ｔ（159）=-7.700，p<.001），因子2で男子＜女子（t（160）=-4.120，p<.001），因子3で男子＞女子（t（160）=1.813，.05<p<.10）の傾向が見出された（Table 7, Fig.2）.

したがって，因子１に含まれる「困っていたら助ける」「ありがとう，上手だね，等のほめ言葉」のような友人関係の「協同性に関する社会性」や因子２の「友だちが他の子と仲良くしていると心配で，嫌な気分になる」といった「排他性の気分的な側面」は，女子の方が優位である．しかし，因子3の「排他性の行動的側面」は，男子の方が高いことが確認できた.

因子1と因子4が有意な正の相関であったため，これらを社会性関連因子とし，同様な理由から因子2と因子3を排他性関連因子とした．また，因子1と因子3に負の有意な相関（r=-.312，p<.01）が，因子3と因子4に有意な負の相関（ｒ=-.290, p<.01）が見出されたことから，社会性関連因子と排他性関連因子とは反対の方向性をもつ因子であると考えられる.

社会性関連因子（平均値3.62，SD.64）と排他性関連因子（平均2.67，SD.78）とを比較すると，社会性関連因子の平均得点が有意に高かった（t（277）=14.759，p<.001）．男女別に検討すると，社会性関連因子は，男子（平均値3.48，SD.59），女子（平均値4.01，SD.51）であり，上述の結果から予想されるように，女子の方が有意に高い得点であった（t（159）=-6.124，p<001）．排他性関連因子に有意な性差は認められなかった.

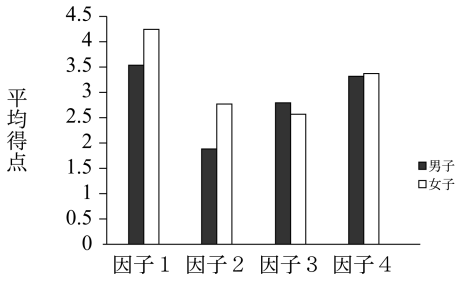

Fig. 2 因子1（社会・協同）因子2（排他・気分）因子3（排他・行動）因子4（社会・自己主張），男女別平均得点

５）親しい友人間のいじめに影響を及ぼすと考えられる要因と親しい友人へのいじめの加害体験・被害体験に及ぼす影響のパス解析

因子A（いじめ加害体験）と因子B（いじめ被害体験）を目的変数とし，因子1（社会性・協同），因子2（排他性・気分），因子3（排他性・行動），因子4（社会性・自己主張）を説明変数としてパス解析を行った（Fig.4）.

Table 4　親しい友人間の「いじめ」被害体験・加害体験に関する項目の因子分析結果

番号(記号)	内　　容	因子A	因子B	共通性
01(A)	友だちに「意地悪なことをしたい」と思うことがある	.782	−.133	.509
03(A)	仲よしの友だちをいじめたことがある	.729	.015	.544
04(A)	仲よしの友だちを仲間外れにしたことがある	.690	.064	.531
02(A)	仲よしの友だちを無視したことがある	.626	.071	.544
06(R)	仲よしの友だちに無視されたことがある	−.050	.869	.706
05(R)	仲よしの友だちにいじめられたことがある	.042	.661	.471
	負荷量平方和	2.473	1.956	

注1　因子分析前の記号　A:加害体験　R:被害体験　因子A・因子Bの相関係数:r＝.420

注2　因子A:いじめ・加害体験因子　因子Aのα＝.811　因子Bのα＝.728

因子B:いじめ・被害体験因子

Table 5　「いじめ加害体験」,「いじめ被害体験」の因子別平均得点の男女差

因 子 名	男 子	女 子	t値(df)	p
	平均得点(標準偏差)	平均得点(標準偏差)		
因子A(いじめ加害体験)	1.88 (.64) n=84	1.67 (.74) n=77	1.974 (159)	p<.05
因子B(いじめ被害体験)	2.14 (1.03) n=85	2.12 (1.12) n=77	.144 (160)	n.s.

Table 6　親しい友人間の「いじめ」に影響を与えると考えられる13項目の因子分析結果

番号(記号)	内　　容	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
12(S1)	友だちが困っているから助ける	.675	−.050	.008	.055	.366
09(S1)	友だちに「ありがとう」と感謝の気持ちを表すことができる	.620	−.045	.024	.009	.290
14(S1)	友だちが上手くやったら,「上手だね」とほめることができる	.583	−.039	.026	.031	.270
15(S1)	友だちに何か頼まれたら,それにこたえる	.564	.037	.016	−.007	.234
26(IN)	友だちと交換日記や手紙のやり取りができる	.382	.369	.147	−.121	.228
20(EX)	一番の友だちが,他の子と楽しそうにしていると,嫌な気分になる	−.097	.881	−.010	.028	.507
21(EX)	一番の友だちを,他の子に取られそうで心配になることがある	.022	.735	.125	.047	.234
19(EX)	友だちと遊んでいるとき,友だちでない子も一緒に遊んでいると楽しくない	.045	.023	.617	−.094	.284
22(EX)	遠足や社会見学のとき,仲良しの友だちだけで一つのグループを作りたい	−.022	−.088	.603	.072	.222
17(EX)	自分の気持ちの中で,自分の友だちとそうでない子をはっきり分けている	.045	.095	.557	.016	.507
23(EX)	他の子のいる前でも,仲のよい友だちと内緒話をする	−.045	.109	.351	−.055	.203
11(S2)	友だちが良くないことをしたら,注意する	.032	−.055	.064	.843	.522
10(S2)	友だちが迷惑になるようなことをしたら,止めるようにいう	.002	.108	−.095	.803	.538
	負荷量平方和	2.068	1.638	1.736	1.844	

因子間相関行列	因子1		.033	−.312	.427	
	因子2			.327	−.022	
	因子3				−.290	
	α係数	.647	.819	.637	.814	

注1　因子分析前の記号
S1:共感・援助スキル
S2:積極主張スキル
EX:排他性
IN:友人指向性

注2　因子分析後の命名
因子1:社会性・協同因子　因子2:排他性・気分因子
因子3:排他性・行動因子　因子4:社会性・自己主張因子

Table 7　「社会性・協同」,「排他性・気分」,「排他性・行動」,「社会性・自己主張」の因子別平均得点の男女差

因　子　名	男　子	女　子	t値（ df ）	p
	平均得点（標準偏差）	平均得点（標準偏差）		
因子1（社会性・協同）	3.54　（ .63）　n=84	4.27　（ .56）　n=77	−7.700　（159）	p<.001
因子2（排他性・気分）	1.89　（ .98）　n=85	2.77　（1.37）　n=77	−4.120　（160）	p<.001
因子3（排他性・行動）	2.79　（ .75）　n=85	2.57　（ .79）　n=77	1.813　（160）	.05<p< .10
因子4（社会性・自己主張）	3.32　（ .85）　n=85	3.36　（ .81）　n=77	− .354（160）	n.s.

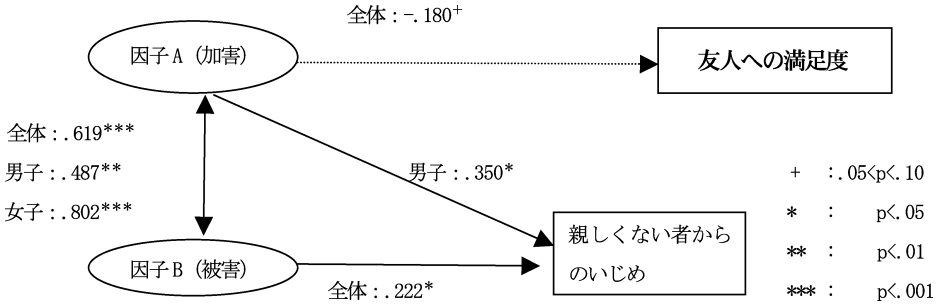

Fig.3　因子A（加害）、因子B（被害）と「友人への満足度」のパス解析

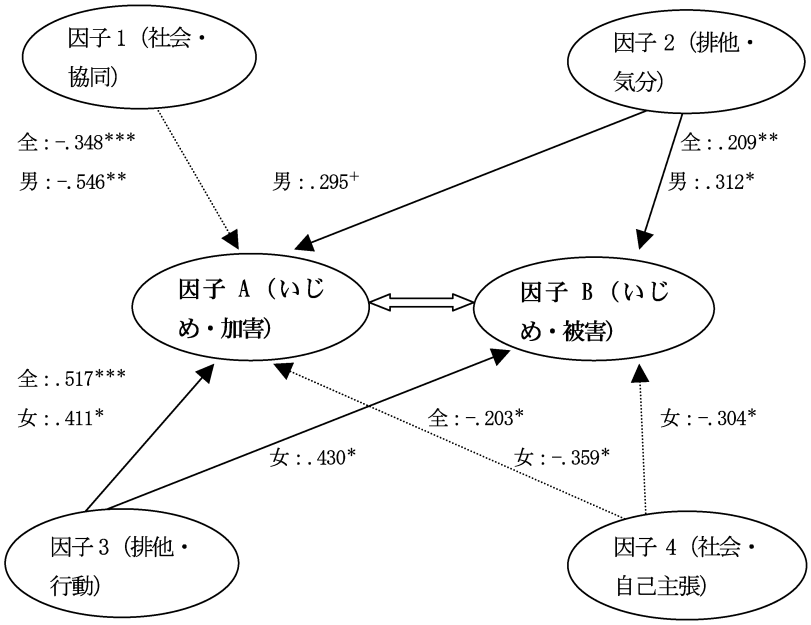

Fig. 4　社会性関連（協同・自己主張）因子、排他性関連（気分・行動）因子と
いじめ体験関連（加害・被害）因子のパス解析

因子A（加害体験）へのパスは，因子1からの推定値（全体：-.348，男：-.546）と因子4からの推定値（全体：-.203，女：-.359）が有意であった．また，因子2からの推定値（男：.295）と因子3からの推定値（全体：.517，女：.411）が有意であった．

したがって，親しい友だちへの加害体験は，社会性関連の因子と負の関係にあること，排他性関連の因子とは正の関係にあることが確認された．

因子B（被害体験）へのパスは，因子4からの推定値（女：-.304）が有意であり，因子2からの推定値（全体：.209，男：.312）と因子3からの推定値（女：.430）が有意であった．

したがって，親しい友だちからの被害体験は，社会性・自己主張因子とは負の関係にあり，排他性関連因子とは正の関係にあり，排他的行動が被害体験を高めていることが示唆された．

男女別に検討すると，男子の場合，親しい友だちへのいじめ加害体験は，社会性・協同要因と弱い負の関連があり，排他性・気分の要因と正の関係がある．また，親しい友人からのいじめの被害体験は，排他性・気分と正の関係があることが示された．女子の場合，親しい友だちへのいじめ加害体験は，排他性・行動と正の関係が，社会性・自己主張とは負の関係が見出された．親しい友人からのいじめの被害体験は，排他性・行動と正の関係が，社会性・自己主張とは負の関係が有意であることが確認された．

結　論

１）親しい友だち・親しくない友だちからのいじめの被害体験

親しい友だちからのいじめの被害体験は，親しい友だちからの被害体験は19％，親しくない友だちからの被害体験は16％と，小学校5・6年生の学級にいじめの存在が明らかになった．しかし，三島(2003)の結果(親しい友だちからのいじめ16％，親しくない友だち19％）と比較すると，親しい友人からのいじめが若干多い傾向にある．また，いじめの被害体験の性差に有意差はなく，親しい友人からの被害体験は女子に多いとする三島(2003)，森田ら（1999）とは異なるものであった．

２）親しい友人間にみられるいじめの加害体験と被害体験

親しい友人へのいじめの加害体験（４項目）と被害体験（2項目）との関連性を検討したところ，加害体験と被害体験は密接に関連しており，男女ともに同様な傾向が認められた．加害体験は男子の方が高いが，被害体験には有意な性差が確認されなかった．

この結果は，親しい友人を「いじめる」ことと「いじめられる」こととは密接に関連しており，これらの行為を通して親しい友人関係が形成され，男子の方がより顕著であることを示唆している．

３）親しい友人への加害体験と親しい友人からの被害体験と友人への満足度

友人への満足度に友人への加害体験と被害体験がどのように影響しているかをパス解析により検討した．友人への加害体験は友人への満足度に弱い負の影響を与えていたが，被害体験には有意な関連が見出されなかった．また，親しくない友だちからのいじめは，友人への満足度に影響していなかった．ちなみに，加害体験と被害体験ともに親しくない友だちに影響を与えていた．三島（2003）の結果は，被害体験と友人への満足との間に負の関連が見出されたが，本研究では，有意な関連性及び性差も認められなかった．

４）親しい友人間にみられるいじめに影響していると考えられる要因の構造

13項目を因子分析（主因子法，プロマックス回転）し，因子１（社会性・協同），因子２（排他性・気分），因子３（排他性・行動），因子４（社会性・自己主張）の４つの因子を抽出した．有意な相関関係がみられた因子１と因子4を社会性関連因子，

因子２と因子３を排他性関連因子とした．社会性関連因子と排他性関連因子には，負の関連がみられたことから，反対の方向性を持つ因子であるといる. 4つの因子の平均得点を男女別に比較すると，社会性関連因子（協同，自己主張）と排他性関連因子（気分）は女子が高く，排他性関連因子（行動）のみ男子が高いとするものであった.

三島（2003）は，親しい友人間にみられるいじめに影響を与えると考えられる要因について19項目をあげて検討している．その内訳は，共感・援助スキル（4項目），積極・主張スキル（4項目），排他性（6項目），友人指向性（５項目）であり，共感・援助スキルと積極・主張スキルとを社会的スキル因子（8項目）にまとめ，排他性と友人指向性の1項目を排他性因子（7項目）とし，他の友人指向性項目を省き, この2つの因子を分析の対象としている.

５）親しい友人間のいじめに影響を及ぼすと考えられる要因と「いじめ」の加害体験・被害体験に及ぼす影響のパス解析

いじめの加害体験へのパスは，有意な正の関連が因子2（排他性・気分）と因子3（排他性・行動）に有意な負の関連が，因子1（社会性・協同）と因子4（社会性・自己主張）にみられた. したがって，排他性関連因子は加害体験と結び付き，社会性関連因子は加害体験を減少させている．男女別に考察すると，男子は因子1が負の関連を，因子2が正の関連をもっていた. 女子は因子３が正の関連を，因子4が負の関連をもっていることが認められた.

三島（2003）は男女別に検討し，加害体験へのパスは，男子には，社会的スキル因子に負の関連が排他性因子には正の関連が有意となっていたが，女子には，排他性因子のみが有意の正の関連であった．被害体験へのパスは，男子では排他性因子が有意であったが，女子には有意な関連は認められなかった.

【引用文献】

相川　充　1999　ソーシャルスキル教育とは何か　小林正幸・相川　充（編著）　ソーシャルスキル教育で子どもが変わる　―小学校―　（pp.11-30）．図書文化.

坂西友秀　1995　いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差　社会心理学研究，11，105-115.

Buhrmester, D. & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood: A neo-Sullivanian perspective. In V.J. Derlega & B.A. Winstead （Eds.）, Friendship and social interaction （pp.41-62）. New York: Springer-Verlag.

Eder, D. & Hallinan,M.T. 1978 Sex differences in children's friendships. American sociological Review, 43,237-250.

三島浩路　2003　親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究　社会心理学研究, 19, 41-50.

森田洋司・滝　充・秦　政春・星野周弘・若井彌一　1999　日本のいじめ　―予防・対応に生かすデータ集―　金子書房

文部科学省　2007　『平成18年度「児童生徒問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査査」について』

文部科学省初等中等局児童生徒課2008「ネット上のいじめ」に関する対応・事例集（学校・教員向け　PDF：1,143KB）

岡安孝弘・高山　巌　2000　中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス　教育心理学研究，48，410-421.

庄司一子　1994　子どもの社会的スキル　菊地章夫・堀毛一也（編著）　社会的スキルの心理学　―100のリストとその理論―　（pp.201-218）.川島書店

【謝　辞】

調査の実施にあたり，ご協力いただいた小学校の先生方及び児童の皆さまに，記して感謝の意を表します.